

49

「人類のために生き人類のために死す」を 実践した野口英世の思想系譜

殿崎 正明, 山本 鼎

日本医科大学 医史学研究会

はじめに

野口英世の医学研究による人類への貢献に駆り立てた要因は、野口が在籍・卒業した日本医科大学の前身である済生学舎の学是「済生救民」(特に貧しい人々を病から救済すること)の実践にあったのではないかと考えられるが、野口がその精神を受容するに当たり根底となる彼の思想的背景に関しては従来殆ど論じられて来ていないので、その系譜を辿る。

観音信仰

野口家の菩提寺は曹洞宗の長照寺で、野口の母シカは会津美里町にある普門山 弘安寺の中田観音(金銅造十一面観音立像)を深く信仰しており、野口が生涯の恩師・父と仰ぐ小林栄も熱心な観音菩薩の信仰者であった。野口が大正4(1915)年に米国から15年振りの帰国をした際に、大業をなし遂げるにあたって観音様と心が通じておれば必ずお助け下さることになるといって小林栄が渡した厨子入りの観音像は、野口の亡くなった後、遺品として戻ってきている。そしてその観音像は胎内仏の形で、野口英世記念館の生家邸内に観音堂を作る際に長照寺の本山永平寺を開いた道元禅師と縁の深い一葉観音像を母体仏とする「救世観音」という宝号のもとに祀られている。

キリスト教

会津では、フランシスコ・ザビエルによる西方キリスト教の日本伝来から41年後の天正18(1590)年キリシタン大名蒲生氏郷(霊名レオ)が会津領主となって以後キリスト教が普及した。猪苗代に布教が行われたのは慶長14(1609)年とされ、元和8(1622)年には猪苗代で切支丹弾圧があり、寛永2(1625)年会津の受洗者は360人を数え、寛永8(1631)年12月18日と22日に若松にてそれぞれ42名と10名に火刑及び斬首が行われている。

山内強著『会津のキリシタン：家臣団の伝道 雪原の殉教』(昭和59年)によると、隠れキリシタンが拝んだのではないかと想像させる「マリヤ観音とキリシタン地蔵」として、女性的な観音とマリヤとの親近感から造られた福米沢の真言宗鹿沢山常楽院境内にある子安観音をはじめとして、関脇優婆夷堂(せきわきうぼどう)内にある観音の宝冠の中央に十字がついている如意輪観音、会津若松市にある宝積寺のキリシタン地蔵、大沼郡会津高田町寺入り法蔵寺境内の隣にある、四つ目のついた石造りの祠をもつ白山神社等20あまりのマリヤ、十字架等を連想させる観音、地蔵、灯籠例が紹介されている。また、巻末の方に掲載されている享保4(1719)年亥五月付けの「切支丹類族改帳 猪苗代川西組」には、野口家の菩提寺である曹洞宗長照寺に所属する檀家として20戸、類族(キリスト教から改宗したキリスト教徒の子孫・縁者)30名が記載されており、野口の生誕の地である猪苗代三城潟村にも早くからキリスト教が普及していたことがうかがい知れる。

受洗

野口が受洗した理由は、一般的に英語をはじめとする外国語を学ぶことが目的であったとされているが、一個人がある信仰に入るといことは人生における一大決心を要し、受洗するということは観音信仰の環境で育った野口が江戸時代から潜在し根付いて来ている会津におけるキリスト教精神に感応し、その影響で違和感なく18歳5ヵ月(1895年4月7日)で日本基督教団若松栄町教会にて藤生金六牧師より受洗できたのではないかと想定される。

まとめ

野口が「人類のために生き、人類のために死す」という人生を全うすることが出来た所以は、少年期の母シカおよび小林栄からの観音信仰にはじまり、青年期に入信したキリスト教精神による奉仕活動及び済生学舎における長谷川泰の済生救民思想の実践に求めることが出来るのではないかとこの思想的系譜について述べた。